

ば、私たちはいかにして、道徳に頼らずに、他者に共感し共苦することができるのだろうか。それはいったい自発的でありうるのだろうか。この点で本書は、社会的分断を生きる現代の私たちに、よりよき生き方を考えるためのヒントを与えてくれる、哲学の書なのである。

柄木田康之・須藤健一編。『オセアニアと公共圏—フィールドワークからみた重層性』昭和堂、2012年、320p.

紺屋あかり\*

本書は、オセアニア新興国における公共圏の出現とその動向に焦点を当て、国民形成の文化論を展開するものである。オセアニアの研究に公共圏の概念を最初に持ち込んだのはリプーマ [LiPuma 1997] であるが、リプーマも指摘するように本書でいう公共圏とは、市民社会の形成が「国民」を想像する共同体といういわゆる西欧的概念の中に捉えるものではなく、オセアニアにみられる国家や一元的市民社会に対立する共同体への決定的な指向性であると想定されている。伝統的には小規模社会からなるオセアニア地域における国家に対するアクターとしての「国民」や「国民意識」がどのように創造されうるのかという点が、本書に設定された問いである。そこで、独立以降のオセアニア社会がもつ重層的な公共空間について、交易ネットワーク、メディア、贈与空間、ディアスポラ、多言語、

宗教、紛争など多領域において設定された問題群からフィールドワークにもとづいた具体的な事例をもとに検証している。

本書は三部から成り、第1～7章で構成されている。公共圏の重層性（第I部）、トランスナショナルな公共圏（第II部）、多配列な公共圏と単配列な公共圏（第III部）を表題とし、ミクロネシア連邦ヤップ州、ソロモン諸島、フィジー共和国、サモア独立国、ヴァヌアツ共和国、パプアニューギニア、キリバス共和国、パラオ共和国（以上章順）を対象とした事例を提示している。以下に各部（章）の内容を概要する。

第I部では、地域・親族など既存の人的諸関係からの「離脱」と「無縁化」において新たに形成される公共圏を中心に議論がすすめられる。人びとの社会関係が規範性から重層性へと推移する動態や、伝統的空間と新たに形成された公共空間との重なりについて事例から検証されている。第1章では、ミクロネシア連邦ヤップ州離島の交易ネットワークにみる民主主義的制度の発展と本島離島関係の二元化を実証的に明らかにしたうえで、公務員アソシエーションの果たす対抗的公共圏の役割を指摘し、伝統的な交易パートナー関係（サウエイ）がサバルタンな公共圏を形成していることを明らかにしている。第2章では、1998年から2003年までソロモン諸島で続いたエスニック・テンションと呼ばれる国内紛争をきっかけとした州レベルの分離運動から、開発的公共圏について検証している。「疎外」されるのではなく「離脱」する市民社会に目を向け、開発をめぐる揺れ動

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

く国民感情が公共圏の伸縮と連動していると指摘したうえで、ソロモン諸島において構築される再帰的近代を描いている。第3章では、フィジーのラミ運動（1949年頃に結成された共同組合的組織）の検討から、地域・親族からは「無縁化」（デラネシ化）する社会関係を提示している。また、ラミ運動がフィジーの人びとによる公共性の特質を帯びた運動と一般化しない立場をとりながらも、しかしこのラミ運動が、グローバル化が既存の社会関係から距離を置くことを相対的に可能にする活動としての先駆けであったと指摘する。第4章では、サモア社会にみるマウ運動（諸外国による統治に対する現地住民からの抗議運動）から、ドイツ統治下、ニュージーランド統治下にそれぞれ勃発した公衆衛生政策をめぐる2つのマウ運動について検討している。第2マウ運動時にみられた公共圏の生成を指摘し、マウ運動を軸にサモア全土にわたる運動組織が形成されていった背景について、①ヨーロッパ系住民による19世紀的な市民的自治の理念の存在、②「討論の場」の基層としてのサモア伝統的政治システム（ボトムアップ型の組織）の存在などをあげている。第6章では、贈与をめぐる公共性について、ヴァヌアツの名前の贈与儀礼を対象に検討している。贈与交換が行なわれる場を公共圏と捉える立場をとりつつも、「譲渡できないもの」の存在について指摘し、譲渡できる範囲を私的領域としたうえで、2つの極の間を揺れ動きつつ再編される「カスタム」を描いている。第7章では、パプアニューギニアにおいてこれまで国民アイ

デンティティの希薄化が指摘されてきた背景を提示したうえで、ワントク（ひとつの言語を話す人びと）と呼ばれる関係性を多文化的な公共圏といえるのかどうかについて検討し、「コミュニティ調停者」の存在がパプアニューギニア都市における新たな公共圏の契機となる可能性を示唆している。ここまでの一連の章においては公共圏ないしは公共空間は既にあるものとして設定されているが、しかしそもそもオセアニア社会に公共空間なるものが存在するのかと問い直す立場が第5章ではみられる。サモア社会において今後コンテキスト・フリーのコミュニケーション空間（すなわち公共空間）の比重が増えるとしながらも、少なくとも現在のサモア社会においては未だ伝統的な言論空間とメディアという2つの異なる言説空間が結び合わない状況を描いている。

第II部では、「移動」によって形成される公共圏について論じられている。ここでは、複合社会で発達しはじめている公共空間は、政治的制度と集会的欲求の結節点である〔メルッチ 1997: 225〕とする見方にあるように、移動することによって新たに形成されるトランスナショナルな公共圏が提示されている。第8章では、キリバス諸島バナバ人のディアスポラとしての生活実践と歴史経験の多様性が、トランスナショナル・ネットワークとしてのポスト近代性を帯びたオルタナティブなディアスポラの公共圏を構築していると指摘する。第9章では、パプアニューギニアの華人社会と、パプアニューギニアか

らオーストラリアへ移住した華人の他言語状況を対象に、共同体内でのコミュニケーションが必ずしも容易ではない現状を指摘し、オセアニア社会においてネイションにのみ規定されないトランスナショナルな公共圏の在り方を示唆している。第 10 章では、トランスナショナルな公共圏が果たした役割について、パラオの大統領選をめぐって形成されるグアム、サイパン、ハワイ、アメリカ本土における互助組織の活動から論じ、情報化社会、コミュニケーションの多様化を背景として創出（あるいは拡大）される公共圏の整備と、複数の公共圏をつなぐ公共空間の設定の必要性について指摘している。

第Ⅲ部では、そもそも伝統的共同体としてのオセアニアには、ハーバマスらのいう公共圏は存在しないのではないかとする立場をとったうえで、新たに「地域的公共圏」の考え方を提示している。第 11 章では、オセアニア社会における国民国家の生成や中間カテゴリーの成立についてふれながらも、しかしそれらがオセアニアにおける公共圏を成立させているわけではないとする。そこで、ニードハムの指摘する「現実の社会にあるさまざまな現象は多配列的である」[Needham 1975] や、ハーバマスのいう「文芸的公共圏」[ハーバマス 1994] にみる多配列的な性質をもつローカルな社会、さらには斎藤の定義する公共圏 [斎藤 2000] とヴァヌアツの都市部やカヴァバーなどを照らし合わせながら、単配列・多配列的な枠組みからみると親密圏は公共圏に転換しないことを主張したうえで、ここでは親密圏が再創造する状況が報告

されている。第 12 章では、宗教と公共圏をめぐる議論が展開される。第 2 章にも取り上げられたソロモン諸島に起こったエスニック・テンションに顕在化した暴力排斥運動にみる、教会活動とガバナンスの構築を中心に議論がすすめられる。「公共宗教」という概念が、ソロモン諸島において定着化する過程を掘り下げている。先行研究者らが期待を寄せていた公共宗教のもつガバナンス構築への役割はあまりみられず、実際にはむしろ「公共宗教」概念のグローバル化がすすめられているに過ぎない状況を指摘する。第 13 章では、太平洋諸島フォーラムを対象に、公共圏と市民社会の関係について考察がすすめられる。そこでオセアニア社会における「地域的公共圏」の機能性について、トランスナショナルな NGO を中心とした市民社会による政策への参画、貿易自由化をめぐる対抗的言説の展開をあげ、その重要性について指摘している。

もっとも、本書がポリネシア、メラネシア、ミクロネシアの地域区分において各部が構成されているのではなく、公共圏と公共空間の多様な在り方を 3 段階（中間的カテゴリーや重層的な公共空間、ディアスポラの公共圏、地域的公共圏）に整理して公共空間を捉え直している点からみて、本書において指摘されたのが単にマイクロステートと呼ばれる新興国下における公共圏の出現（もしくは出現しない状況）や「国民」の構成だけでなく、オセアニア社会における地域的枠組みに関する新たな捉え方を提示したものであるといえる。そうした重層のかつ複合的な圏的な

ネットワークの出現は、今後のオセアニア社会を考えるうえで非常に重要な視座であることを本書は問題提起として指し示している。評者をふくめ、オセアニアに限らずフィールドから共同体ないしは地域を俯瞰し現代社会を考えようとするうえで、本書は最良の手引きとなるだろう。

### 引用文献

#### 日本語

- メルッチ, A. 1997. 『現代に生きる遊牧民—新しい公共空間の創出に向けて』 山之内靖・貴堂嘉之・宮崎かすみ訳, 岩波書店.
- ハーバマス, J. 1994. 『公共性の構造転換』 細谷貞雄・山田正行訳, 第二版, 未来社.
- 齋藤純一. 2000. 『公共性』 岩波書店.

#### 英語

- LiPuma, E. 1997. The Formation of Nation-states and National Cultures in Oceania. In R. J. Foster ed., *Making Nation; Emergent Identities in Postcolonial Melanesia*. Michigan: The University of Michigan Press, pp. 33-68.
- Needham, R. 1975. Polythetic Classification, *Man* 10: 349-369.

田辺繁治. 『精霊の人類学—北タイにおける共同性のポリティクス』 岩波書店, 2013年, 270 p.

津村文彦\*

現代日本を代表する文化人類学者が、1985～86年の調査を軸に2012年まで補足した民族誌データに基づいて、1990年代から2000

年代初頭にかけて発表された6つの論文を改稿し、書き下ろしの序章と終章で包み込んだのが本書である。北タイの精霊信仰をめぐる30年来の著者の研究集成でありながら、精霊の力のポリティクスをテーマに各章が戦略的に配置されており、簡潔で鋭利な筆致に乗せられ、読者は田辺人類学の精霊論に瞬時に引き込まれる。2010年の『「生」の人類学』で示されたイデオロギー効果と新たな共同性についての分析視点を基盤にして、本書では、コン・ムアン社会の精霊儀礼における、権力と儀礼、〈生〉との接合について幅広い領域にわたって議論が展開される。

序章「精霊とは何か」では、従来のタイの精霊研究にみられる象徴論を批判し、モースの「マナ論」を参照して精霊を「実在する力」として論じる立場を提示する。タイの心身観では〈魂と身体の平衡〉が人格の正常な状態とされる。精霊など外来の力が作用すると平衡が破壊され病や苦悩をもたらすが、儀礼を通じて精霊が守護霊に転換されることで健康と幸福が回復される。この精霊の力は、個人を超えたレベルでも作用し、アルチュセールの「イデオロギー一般」のように秩序と権力を正統化して、共同性を作り出すものと位置づけられる。

第1部「伝統社会の基層としての精霊」では、伝統的な精霊儀礼が内包するポリティクスを、親族、村コミュニティ、国家の3つの守護霊儀礼の検討を通じて明らかにする。1章「祖霊と女性—ピー・メン儀礼」は、母系親族の祖霊供養儀礼を検討する。コン・ムアンでは、女性は、男性に比べて〈魂—身

\* 福井県立大学学術教養センター